

「遠く離れていても」

(放蕩息子の帰還)

(ルカ15:20b~24)

挽地茂男

2019.7.14 日本基督教団千歳丘教会

先々週からルカによる福音書の15章を読み始めました。初回には「失われた羊のたとえ」と「失われた銀貨のたとえ」を読みまし



た。〈失われた〉と訳されている〈アポリューミ〉という言葉はもと「滅びる」とか「死ぬ」という意味の言葉です。羊飼いと羊の群れから〈失われた羊〉は単独では自分の



身を守ることも出来ず、野獣に襲われる可能性もあり放っておけば、実質においてすでに死んでしまったも同然なのです。また持ち主の手から〈失われた銀貨〉が、そのまま放置されれば、本来の用途からすれば機能上は死んでしまったも同然の単なる物なのです。放蕩息子の物語の前に語られる二つのたとえ話は、失われた者、つ

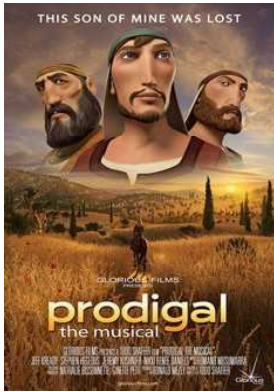
まり、既に本質的に死んでしまった者を憐れんで、ひたすら捜し出す神さまの愛を語っているのです。その愛が放蕩息子を立ち上がらせることになるのです。

先週からその「放蕩息子」の物語を読み始めました。放蕩息子の帰還が3つのステップで描かれます。故郷から遠く離れた異邦人の地で、放蕩三昧のあげく財産を使い果たして、豚の世話をするところまで身を持ち崩してしまった弟息子は、まず第1に①我に返ります

(εἰς ἑαυτὸν δὲ ἐλθὼν)。外国からやって来て派手に遊び回っていた若者の噂はもう過去のものになっていました。金銭を持たない彼を相手にする者は、誰もいなくなっていたのです。まるで群を離れた一匹の小羊のようなひとりぼっちで孤独でした。

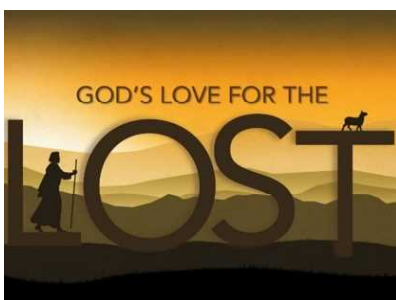
しかし豚の餌でおなかを満たしたいと思うほどの飢えと困窮の中で父を思い出した(想起した)ので





ています。彼の中に愛の記憶（想起）が甦ってきたのです。そして第2のステップです。

第2のステップで彼は、②立ち上がります（*ἀναστὰς*）。彼の意志が行動に表われます。この「立ち上がる」という言葉の名詞形〈アナスタシス〉は復活を意味します。人を再び立ち上がらせる力、人生を再生させる力は、父の記憶、愛の記憶の中にあつたのです。〈失われた者〉つまり、既に本質的に〈死んでしまった者〉を、憐れんで、ひたすら捜し出す神さまの愛が放蕩息子を立ち上がらせるので



す。そしてその愛が、罪人が悔い改める前提、あるいは根

拠なのです。

そして第3のステップは③父親の許に行くことです。こうして弟息子は父親の許に戻ってきます。

先週、羊飼いが捜していたのは「一匹の羊」ではなく「**わたしの羊**」であると言いました。代わりがない羊です。また、女が捜していたのも一枚の銀貨ではなく「**あの銀貨**」なのです。他の銀貨では駄目なのです。息子は「父のところでは」と語っていますが、原文では「**わたしの父**のところでは」です。「ここを立ち、父のところに行って言おう」も「ここを立ち、**わたしの父**のところに行って言おう」なのです。息子が我に戻って気がついたことは、あの父親は「**わたしの父**」であるということです。自分の命の源としての父です。その父なくして自分の命など存在しないという意味での「わたしの父」です。その父の許では、雇い人たちも有り余るほどのパンを食べている。

しかし、彼には、息子として父の許へ帰ることができるとは思えません。「もう息子と呼ばれる資格はありません」の「息子」も「**あな**」の息子」です。「もう **あなた**

の息子と呼ばれる資格はありません」18節以降の「息子」や「父親」という言葉には、原文では「**あなたの**」とか「**わたしの**」という言葉がついています。父と息子の人格的な関係が強調されているのです。弟は、父が自分にとってかけがえのない存在であることに気づいたのです。しかし、それはその人格的な関係を、自分で捨ててしまってからのことでした。

しかし、「彼はそこをたち、父親のもとに行った」のでした。この「父親のもとに行った」(*ἦλθεν πρὸς τὸν πατέρα ἑαυτοῦ*)は原文では息子が「我に返った」とそっくりの用語法をとっている、と先週申し上げました。直訳すれば「彼自身の父親の所に行った」となります。「我に返る」を直訳すると「自分自身のところに行く」でし

た。つまり「我に返る」とは言い換えれば「自分の父の許に帰る」ことなのです。けれども、その時には最早——繰り返しますが——父の息子である資格を失っているのです。人間に与えられた自由が、無思慮に誤って用いられた場合に、もたらす結果は破壊的です。それは、人間の歴史と経験が示す現実です。

そのことに気付いた時、すべてを諦めるか、それでも帰ろうとするか。それを左右するのは愛の記憶です。主イエスが語った「失われた羊」のたとえ(4-6節)と「失われた銀貨」のたとえ(8-9節)は——すでに言いましたように——人間にはない神さまの愛を語っています。どんな手間暇が掛かろうが捜し出す愛、見つけた時には損失を惜しまずに祝う愛、そういう愛で



わたしたちは神に愛されていることを、主イエスはファリサイ派の人々や律法学者、また徴税人や罪人たちに語りかけたのです。

愛の記憶が弟息子を動かしました。20節a「15:20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った」のです。視点が帰還する息子から、待つ父親へと移行します。今日はこの父親に、焦点を合わせなければなりません。20節b。

「15:20…ところが、まだ遠く離



れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」

「憐れに思い」とは「腸がちぎれるような」強い憐れみの情に突き動かされて、という意味です。



その思いに突き動かされて、父親は家の外に出て、息子に走り寄ります。ということは、この父親は毎日窓辺に立って、「今日は帰って来るか、今日は帰って来るか」と外を見つめつつ待つて



いたのです。息子が父を見つけるよりも前に、父は息子を見つけたのですから。

ここで使われている「憐れむ」という言葉〈スプラנקニゾマイ〉(σπλαγχνίζομαι)は、「同情する」「憐れむ」と訳しますが、一般的に「同情する」とか「憐れむ」という意味で使われる言葉(エレエオー ἐλεέω やオイクティロー οἰκτίρω)とは違うニュアンスを持った言葉です。この〈スプラנקニゾマイ〉という言葉は、「内臓」、すなわち腸や肝臓・腎臓などを指す名詞〈スプラנקノン〉(σπλάνχνον)に由来します。内臓は人間の感情の座であると見なされていたため、この言葉は「憐れみ、愛」などの意に転化し、それが動詞化したのです。この言葉は福音書では、主イエスの愛を表現するのに頻繁に使われます。それは「真に相手に寄り添い、相手の苦難を軽減しようと望み、実際そのように働く能動的な」愛を表現します(本多峰子『悪と苦難の問題へのイエスの答え——イエスと神義論』同書 p.144)。

おそらく中国の故事に由来する「断腸の思い」という表現もわた

私たちの理解を助けてくれるでしょう。この言葉の由来となる故事は『世説新語』（せせつしんご）という説話集の第二十八篇の「黜免



（ちゅつめん）篇」の中に出てきます。中国（当時の晋）の武将桓温〔かんおん、前312～373年。齊国第十五代君主の桓公（在位前685～643年）の説もある〕が船に乗って蜀に行く途中で三峡という

所をを渡ったときに、従者が猿の子を捕らえて船にのせました。その子猿の母猿は悲しい声をあげて泣き、岸に沿ってどこまでも追いかけて百里以上もついてきてあきらめようとせず、遂に船が岸に近づいたとき、船に飛び乗りました。しかし、その母猿は船に飛び移るとすぐに息絶えてしまいました。そしてその母猿の腹を割いてみたところ、母猿の腸はズタズタに断ち切れていました。この話を聞いた桓温は怒り、この従者を罷免しました。この故事から、「はらわたがちぎれるほどの耐えがたい悲

しみや苦しみを「断腸の思い」と言うようになったのです。〔原文 桓公入蜀、至三峡中。部伍中有得猿子者。其母縁岸哀號、行百餘里不去。遂跳上船、至便即絶。破視其腹中、腸皆寸寸斷。公聞之怒、命黜其人。〕

福音書に見られる〈スプラUNKニゾマイ〉という言葉を使ったイエス・キリストの描写は「人となられた神」の人の部分をよく表しています。神のもつ「断腸の思い」を表現します。人間の悲しみや苦しみを共有する神、共苦する神は人の苦しみに思いを寄せられるのです。人の苦しみに「断腸の思い」を持つ神は、自らも叫び祈るのです。ヘブライ人への手紙5章7節。「ヘブル 5:7 キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」キリストは断腸の思いと無縁の方ではないのです。

父親は、強い憐れみの情に突き動かされて走り出しました。古代パレスチナでは、大の大人が走ることは品位を欠く行為と見なされ

ていました（NIB『ルカ福音書』391）。父親にとって、今はそんなことはどうでも良いことなのです。父親の心の中には、これまでに味わった断腸の苦しみを癒やして余りある喜びが、今、あふれつつあったのです。走り寄らずにはいられなかったのです。

息子は、我に返った時に自分自身に語りかけたように、こう言いました。21節。「**息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう（あなたの）息子と呼ばれる資格はありません』。**」そこまでで、彼の父には十分でした。弟息子は「かつての私は、あなたの息子として至りませんでした。しかし、これから頑張ります。チャンスをください」と言ったわけではありません。自分の中にはまだ息子として生きる可能性があると思い、それを父に見て



欲しいと願っている訳ではないのです。彼の中には何の可能性もないのです。そのことを



彼は我に返ることで、そして自分の父の所に帰ることで、そして父に抱き締められ、接吻されることで知ったのです。死んだ者には何の可能性もありません。死ぬとは、そういうことなのです。

父が息子に知って欲しかったことは、そのことだと思います。自分の中には、子として生きる資格など全くない。自分は、父親がその生涯をかけて築いた財産を湯水のように使い尽くすことにおいて父を殺し、そのことにおいて子としての自分の命を殺してしまったのです——父親が弟に分与した財産を表す原語(**βίος**)には生命という意味があります。人間は失われた存在であること、そのことを知る。人間が知るべきことは、そのことなのではないかと思います。息子がそのことを知った。知ったが故に帰って来た。だから父

親はこう言います。22－23節。

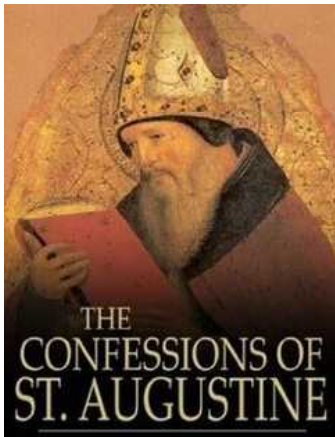
「15:22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。15:23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。』僕たちに最上級のもてなしを準備するように命じつつ、そして父親はこう言うのです。24節。「この（わたしの）息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」

15章の3つのたとえ話は、「失われた者」を「捜し求める神」を、三重のイメージで強調します。（失った羊を）捜している羊飼ひ、（失った銀貨を）捜している女、（失った息子を）待っている父親。すべて捜し求める神の姿を描きます。ところで、羊を失った羊飼ひは羊を捜しに行きました、銀貨をなくした女は家捜しをしました。なのに何故、断腸の思いに駆られるほどの息子を愛する父親は、どうして息子を捜しに行かなかったのでしょうか。この点が3つ目のたとえ（放蕩息子のたとえ）の大切なポイントになります。これは悔

い改めということと深く関係してきます。まず、(1)人間は動物（羊）や無機物（コイン）とは違います。人間は精神を持っています。見つければそれでよしという物ではないのです。もし父親が、(2)捜しに行ったとしら息子は戻ってきたでしょうか。状況によりますが、おそらく戻ってこないでしょう。つまり悔い改めとは個人が行う方向転換であって、意志的な決断なのです。決断は小さなものであっても、扇の先は広がるように、決定的な意味を持つのです。「待つこと」それは、父親が自分に課した一線だったのです。息子に「走り寄る」父親の姿に、父親は「捜す」気持ちで「待っていた」ことが理解できるのです。

エレミヤスという新約学者はこう言いました。「悔い改めは、再び「アッバ」〔父よ〕と言うことを学び、天の父に自分の全信頼を置き、父の腕と父の家に戻ることを意味する」（Jeremias, *New Testament Theology*, [trans. John Bowden] p.156）。告白文学の最高峰と呼ば



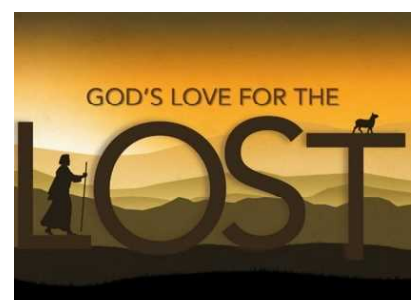


れる『告白』
という作品の
中でアウグス
ティヌスは神
に向かってこ
う告白します。

「あなたは私
たちを、ご自身にむけてお造りに
なりました。ですから私たちの心
は、あなたのうちに憩うまで、安
らぎを得ることができないので
す」（『告白』1.1.1）。

新しい一週間も神さまと共に歩
んでまいりましょう。祈りましょ
う。

2019.7.14 日本基督教団千歳丘教会



15:20…ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。15:21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』 15:22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。15:23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

15·20 … … ἔτι δὲ αὐτοῦ μακρὰν ἀπέχοντος εἶδεν αὐτὸν ὁ πατὴρ αὐτοῦ καὶ ἐσπλαγχνίσθη καὶ δραμὼν ἐπέπεσεν ἐπὶ τὸν τράχηλον αὐτοῦ καὶ κατεφίλησεν αὐτόν.

15·21 εἰδὲ ὁ υἱὸς αὐτῷ, Πάτερ, ἡμάρτον εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ ἐνώπιόν σου, οὐκέτι εἰμὶ ἄξιος κληθῆναι υἱός σου.

15·22 εἶπεν δὲ ὁ πατὴρ πρὸς τοὺς δούλους αὐτοῦ, Ταχὺ ἐξενέγκατε στολὴν τὴν πρώτην καὶ ἐνδύσατε αὐτόν, καὶ δότε δακτύλιον εἰς τὴν χεῖρα αὐτοῦ καὶ ὑποδήματα εἰς τοὺς πόδας,

15·23 καὶ φέρετε τὸν μόσχον τὸν σιτευτόν, θύσατε, καὶ φαγόντες εὐφρανθῶμεν,

15·24 ὅτι οὗτος ὁ υἱὸς μου νεκρὸς ἦν καὶ ἀνέζησεν, ἦν ἀπολωλὼς καὶ εὗρέθη. καὶ ἤρξαντο εὐφραίνεσθαι.